

はばたき学習で探究する子どもたちの姿

「はばたき学習」(総合的な学習の時間)は、年間を通じての研究テーマ、研究の重点をもとに単元計画が構想され、公開する授業の設計・評価を要しながら研究が行われた。昨年度までと異なり、公開研究協議会とオープン研修会の両方で授業公開が行われた。公開研究協議会における佐藤高行先生(中央教育事務所)のご助言も、ポイントを突いた学びの多いものだった。ヤングな総合部のメンバーのご尽力に、感謝申し上げたい。本稿では、はばたき学習を通じて子どもたちの探究する姿を捉えることについて、3つの問いから考えていきたい。とはいっても、昨年度に筆者が執筆した「本実践・研究から見えてくること」と柱は同じである。

(1) 総合的な学習の時間ならではの「わくわく」が感じられる学びだったか

見せていただいたどの授業も、子どもたちがとにかく楽しそうに取り組んでいる様子が見られた。この、総合の時間ならではの「わくわく」は、やはり課題発見、課題探究的な学習がもたらすものであると考える。もちろん教師としては設定した目標があり、子どもたちに獲得させたい概念があるが、そこに向けての道筋の多様性が担保されている(あるいは、担保されていなくてはならない)。そこが教師側もハラハラするところである。課題探究における教師と子どもの緊張感が、総合の時間の「わくわく」につながっていると考える。どこに行くかわからない。そうした学びの幅を担保する上で、教師側の幅広い想定が求められるし、またそれを超えてくる子どもたちの発想を、いったん受けとめられるような受容力が求められるだろう。

(2) 学習課題、テーマへ迫ることを促す「仕掛け」は学習効果をもたらしていたか

子どもたちが課題解決へと迫ることを促す「仕掛け」として、今回は子どもたち同士でピアレビューを行うという活動が大きいものだった。☆をつけたり、動画にコメントをつけたり、という活動はまさにヤングな発想だと感じる。こうした子どもたち同士でお互いが作ったもの、考えたことについてコメントを出し合って評価することは、刺激的なものでもあるし、自分とは異なる考えに触れることができる貴重な場になる。このような活動が成立するためには、よりよいものにするための改善提案をしているということを、教師と子どもたちがお互いに共通理解を持っていることが必要である。そうした共通理解がなければ、同じ言葉を使っている、相手への伝わり方が陰のあるものになり、印象悪く伝わりかねない。4年生の授業では、☆をつけた人にその真意を尋ねに行くという活動もあり、非常に興味深かった。クラスの仲間だからこそできることで、うわべだけの評価をするのではなく、改善提案として生かし、課題追究に生かしているようだった。

また、「思考ツール」も仕掛けとして活用されていた。6年生の授業の「幸せチャート」も思考を可視化するという点で面白かった。あくまでツールとして活用するという意味では、様々なツールをどんどん子どもたちに提案して、思考の可視化を楽しんでもらえばよいように思う。活動を通じて、子どもたちは使いやすいツールを見いだしていけるのではなかろうか。

(3) 子どもたちは自らの学びにおける「行為の中の省察」を行っていたか

この3点目のテーマがいつも難しいと感じている。子どもたちは、自らの学びをどのように自己評価していたかという点で、このことは「学びのものさし」づくりに関わる点である。子どもたちは自らの探究的な学びの中で、いくつかの選択肢から選んだり、他のクラスメートの意見を取り入れたりしている。そうした「自らの行動に焦点を当てた省察」が行われているだろうか。「私はなぜあのような行動を選んだのだろう」と考えるのは、なかなかしんどいものである。子どもたちにそこまで考えさせる必要はないという考え方もあるだろう。ただ、「学びのものさし」をつくっていくなかで、子どもたちが自分の学びを自己評価する際に、同時にそれを客観視することはどうしても必要になる。自分が行ったことに注目し振り返りながら、同時にそれはなぜだろうと問うことはできないだろうか。

授業設計は「教材内容、学習環境、教師の行動などによってもたらされる効果を予測しながら、自らの教授行動を立案していくこと、すなわち仮説を形成していくことである」(西之園晴夫、1981)。形成した仮説がどうであったかの検証とセットで授業づくりを考えること、そしてそのようなサイクルを1単位時間、単元、年間指導計画と様々なレベルで回していくことが重要である。附属小学校のはばたき学習で大きなテーマとしている「多様性理解」という概念は、これからも一層重要なものとなると思われるし、着実に成果を上げているのだと感じる。そうした取組がさらに発展していくように、地道な実践研究を積み上げていきたい。